

大問題「なぜ、ごんはその明るる日も、くりを持って、兵十のうちへ出かけたのか。」

○解釈と発問について

今回の解釈ではごんの「つぐない」について、いつ(時間軸)とどのくらい(程度)の視点から考える。

問題1「ごんはいつつぐなおうと思ったのか。」

㉒「兵十のおっかあは、どこについていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで、兵十が、はりきりあみを持ち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎを取ってきてしまった。だから、兵十は、おっかあにうなぎを食べさせることができなかった。そのまま、おっかあは、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思いながら死んだんだろう。ちよっ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」

㉔「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」

ちがいない…何かが実現すること(事実であること)について、全く疑う余地のがないと判断する様子だ。
してしまった…物事を完了させたことを意味する語。大抵の場合はそれによって悪い結果を生んでしまったという意味合いを含む。

だろう…そうであることが十分に推量・想像出来ることを表す。

ひとりぼっち…仲間や、たよりにする人がいなくなった人(状態)。孤独。

子どもたちは、㉒の時点で「つぐないをしようと思った」という意見が大半を占めていた。しかし、文章をよくみると、波線部分はごんの想像や推量を表している。傍線部分は事実である。つまり、兵十の周りの事実を知ったごんが、自分なりに考えたことがこの文章の出来事である。ここでは「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十」にしてしまったごんの後悔が表れており、この後のつぐないにつながる動機が書かれている。

㉖ごんは、そのすき間に、かごの中から五、六ぴきのいわしをつかみ出して、もと来た方へかけ出しました。そして、兵十のうら口から、うちの中へいわしを投げこんで、あなへ向かってかけもどりました。

つかみ出す…物をつかんで取り出す。

投げこむ…無造作に何かの中に入れる。

かけ出す…駆けて、外へ出る。

かけ戻る…走って戻る。

この時、ごんは兵十の様子を見に来てひとりぼっちであることを知った。そこでいわしを売る声が聞こえたので、衝動的にいわしを投げ込むという行動を取ったのである。この時の行動がごんにとっては兵十へのつぐないであり、自分の後悔の埋め合わせだった。

問題2「ごんはなぜ、次の日も、その次の日もくりを拾っては兵十のうちへ持ってきてやったのか。」

㉗ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました。

㉘次の日には、ごんは山でくりをどっさり拾って、それをかかえて兵十のうちへ行きました。

㉙ごんはこう思いながら、そっと物置の方へ回って、その入り口にくりを置いて帰りました。

㉚次の日も、その次の日も、ごんは、くりを拾っては兵十のうちへ持ってきてやりました。その次の日には、くりばかりではなく、松たけも二、三本、持っていきました。

つぐない・・・自分の犯した罪などによって生じた精神的負担を、それに見合うようなことをすることによってなくす。

まず・・・ほかの事はさておいて、その事を当面の優先的な課題として取り上げる様子。

どっさり・・・ちっとやそっとでは処理しきれないほど数量が多い様子。

そっと・・・人に気付かれないようにひそかに事をする様子。

やる・・・相手に何らかの利益(恩恵)を与えるような行為をすることを表す。

ばかりではなく・・・前項以外にさらに他のものがある様子。

ごんは、自分の行為によって兵十をひとりぼっちにしてしまったことに対し、つぐないをしようという気持ちになった。そのためにひとりぼっちがどれだけ寂しくつらいものであるかを知っていたごんは、その埋め合わせのために、たくさんのくりを継続的に持ってきて、時には松たけも持って行ったのである。それぐらいごんにとってはうなぎを取ってしまったことの後悔が大きかった。

問題3「ごんは、なぜお念仏がすむまで、井戸のそばにしゃがんでいたのか。」

㉛ごんは、二人の後をつけていきました。

㉜ごんは、二人の話を聞こうと思って、ついていきました。兵十のかげぼうしをふみふみ行きました。

㉝ごんは、「へえ、こいつはつまらないな。」と思いました。「おれがくりや松たけを持って行ってやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじゃあ、おれは引き合わないなあ。」

しゃがむ・・・腰を落とし、ひざを曲げ、尻を下げたかっこうをする。

※やる・・・前述の意味から「授受表現」になっている。

引き合う・・・努力した結果が報いられる。

兵十と加助がくりや松たけのことを話していることを聞いたごんは、どんなことを話すのかさらに聞きたくなって、念仏がすむまで待っていた。かげをふむぐらい兵十に近付いたのは、それほど気になったからであろう。しかし、それが神様によるものだ結論付けられ、ごんは自分のしたことが報いられていないことに気付いた。

大問題「なぜ、ごんはその明るる日も、くりを持って、兵十のうちへ出かけたのか。」

㉞その明るる日も、ごんは、くりを持って、兵十のうちへ出かけました。兵十は、物置で縄をなっていました。

それで、ごんは、うらのうら口から、こっそり中へ入りました。

こっそり・・・秘密にしたい(後ろめたい)ことがあって、人に気付かれないうちに事を運ぶ様子。

この時のごんは、引き合わない(報われない)という気持ちから、兵十へのつぐないもあっただろうが、自分の犯してしまった罪の後悔が十分に晴れていなかった。そのため、そんな自分の後悔している気持ちを埋め合わせるためにくりを持って行った。兵十に気付かれずにつぐないを継続的に行うことで、自分の後悔もいつか晴れるだろうと考えていたのである。